

2007(平成19)年8月15日(水)発行



<1945(昭和20)年8月15日はもちろん、第二次世界大戦(太平洋戦争)終了の日>

●第二次世界大戦とは、1939(昭和14)年9月1日のドイツ軍のポーランド侵入から、1945(昭和20)年8月15日の日本のポツダム宣言受諾まで、欧・中東・アジア・太平洋全域での世界的規模の大戦争。日独伊などの枢軸国側は9ヶ国、米英仏ソ中など連合国側51ヶ国が参戦。死者だけでも4,000万人以上と推定。

●太平洋戦争とは、1941(昭和16)年12月8日の日本軍による米国ハワイの真珠湾攻撃から、1945年8月15日の日本のポツダム宣言受諾まで、主にアジアや太平洋側全域での日米英中蘭間中心の戦争。



私がリュ
三周年の兄と小六の妹
後に中学の妹
持てるだけの荷物
を背負い
第一陣は、女性はアメリカ人に暴行されると
いうテーマがとび、女学校を卒業していった十八歳
の姉と、小学五年生の妹の一人が官舎を後にしてしまった。第一陣は、母が生後十ヶ月の妹

六十二年前の昭和二十年八月十五日の終戦を、小学六年生だった私は、朝鮮の大邱(テグ)の駅長官舎で迎えました。太陽がギラギラ照りつける暑い日だったことを記憶しています。

家族は、大邱駅駅長だった四十八歳の父、四十二歳の母、子どもは男三人、女の四人の七人で兄は一歳で亡くなっていたので八人の大家族で、私は次女でした。

三陣に分かれて日本に引揚げ

その終戦の日から慌ただしい雰囲気が家中を充たし、命じられるままに、幼くして亡くなった兄の遺影のある仏壇、七段飾りのおひな様、父の文学全集等を、庭や風呂場で燃やす手伝いをしました。十月初旬だったと思いますが、私たち家族は朝鮮から日本へ、引き揚げを始めました。父は日頃から朝鮮の人々に親切だったので、幸い襲撃されることもなかつたそうです。

第一陣は、女性はアメリカ人に暴行されるというテーマがとび、女学校を卒業していった十八歳の姉と、小学五年生の妹の一人が官舎を後にしました。第一陣は、母が生後十ヶ月の妹

東海道線の汽車の中は、復員兵で通路まで一杯で、歩くところもない混雑でしたが、静岡あたりで車窓より見え

た青空にそびえ立つ富士山の姿に、や

つと日本に着いたという安堵の思いで、その妹も今年六十三歳で孫二人に団まれて生活しています。

その後、上野駅夜8時発の無灯の貨車に乗り込み、月明かりの中にかすかに

翌年二月、鹿島の父の実家の山を借り、開墾して家族全員で移り住みました。道路も水道も極限に達していく。父の顔を見ると罵詈雑言、子供達にも同じで、楽しい家庭生活は皆無に近い状態になってしまいました。母の疲れが極限に達して、歩いたり、私が妹を抱っこしつづけて歩いたり、私も何かと世話ををして過ごし、今考えますと、まず父は生活の水を確保すべきだつたと思うのです。家事をする母の苦しみを今あらためて思います。思春期であった私は、ただ黙々と親に従い、丘一つ越えた農家からの水運びや、薪取り、炊事と、母の顔色を見ながらの生活でした。私が枯れ木を一杯背負つて帰つてくる時だけ母は笑顔で、「道子は薪取りがうまいね」とほめてくれるのです。

富士山の姿にやつと安堵感を

女学校へは通わせてもらいましたが、心にも大きな傷を負わせた戦争

物事を斜めに見る暗い性格に傾いてしまったが、その妹も今年六十三歳で孫二人に団まれて生活しています。

その後、上野駅夜8時発の無灯の貨車に乗り込み、月明かりの中にかすかに

(裏ページにつづく)

小学六年の時 朝鮮で終戦を迎える

8月15日



六十二年目の終戦の日によせて

松本道子

ツクサツクを背負つてつづき、朝鮮の方の憐れみの視線を感じながら官舎を後にしました。第三陣は、全ての後始末を終え、十二月に父が引き揚げて来ました。

第二陣の私たちは、釜山での収容所生活を経て、関釜連絡船にて住み慣れた朝鮮を後にしました。下関港が使用不能としました。第三陣は、全ての後始末を終え、十二月に父が引き揚げて来ました。

五時に原ノ町駅に降り立ちました。朝もその感触を忘れることができません。原町の今の錦町あたりにあつた祖父の家に、一家八人の仮住まいの生活が始まりました。

道路も水も電気もない開墾生活

翌年二月、鹿島の父の実家の山を借り、開墾して家族全員で移り住みました。道路も水道も

電気もない掘立小屋での生活。朝鮮での生

活とは大きな落差もあり、母のストレスは

極限に達していく。父の顔を見ると罵詈雑言、子供達にも同じで、楽しい家庭生活

は皆無に近い状態になってしまいました。

母を恨んだこともあります。今考

えますと、まず父は生活の水を確保すべ

きだつたと思うのです。家事をする母の

苦しみを今あらためて思います。思春期

であった私は、ただ黙々と親に従い、丘

一つ越えた農家からの水運びや、薪取り、

炊事と、母の顔色を見ながらの生活でし

た。私が枯れ木を一杯背負つて帰つてくる時だけ母は笑顔で、「道子は薪取りがうまいね」とほめてくれるのです。

女学校へは通わせてもらいましたが、心にも大きな傷を負わせた戦争

い想い出の一コマです。

見える田畠や木々を眺めたりして、朝

もその感触を忘れることができません。今

も大きな傷を残してしまった戦争だけは避けなければ強く心に思います。

(表のページより)

私は四十年間、看護婦として生きてきましたが、今、この乱世の様な社会に生きる人達の人生観の甘さと、命を粗末にする報道を見聞きする度に、憤り思いました。自分があるのではないか? 私も罪の一端があるのではないか? 人生を生きるのは、生き抜く強さと、命の大切さを、若い世代に伝えなければと思つております。

人生を生きることは、生き抜く強さと、命の大切さを、若い世代に伝えなければと思つております。この事は、生き抜く強さと、命の大切さを、若い世代に伝えなければと思つております。人生を生きるのは、生き抜く強さと、命の大切さを、若い世代に伝えなければと思つおります。

人の一生を踏みにじる

戦争は絶対にいけない!

大人のエゴで始まる戦争は、絶対NOです。弱者がいつも泣いている姿は、もう沢山です。それでなくとも、地球温暖化による異常気象におびやかされている今があります。せめて戦争にだけは巻き込まれないようにしなければなりません。六十二年間、平和を守つてくれた憲法九条を変えることは、その悪が美しい言葉で、國民をあざむくことだと思えてなりません。六十二年間、一度も戦争をしなかつたことを誇りに思っていません。世界中の青少年にアピールしてゆく「九条の会」の役割は、素晴らしいものであります。勉強させていただいたお陰で、理解することが出来まして感謝しています。

今私は七十四歳で、行動する力もあります。草の根が大きく成長し、人の一生を踏みにじる戦争の絶対阻止と、平和の実現を心より願っております。

(はらまち九条の会会員・原町区在住)

GHQが「評価」の書簡

一方的に押しつけられた
一方的な憲法ができる可能性も
古関彰一・独協大教授
の話 鈴木氏に対するG

の世論が研究会草案を評価しなかったことだ。
鈴木氏はこの提案を重ねて、「これまでの憲法を実現するためには、憲法の草案をGHQに受け入れ、修正する必要がある」と主張した。

原氏は、日本公文書を調査し「日本国憲法制定の系譜」（日本評論社）の著書がある。公文書の意味を「新憲法制定が緒

終戦後、新憲法制定を検討する立場にあった連合国軍司令部(GHQ)の担当者が、民間の「憲法研究会」で憲法草案要綱をまとめた憲法学者、鈴木安蔵氏の言論活動に注目する内容の書簡をダ

グラス・マッカーサー最高司令官に送っていたことが米公文書で明らかになつた。書簡の日付は1945年10月23日で、日

書簡を送ったのは、米国務省から派遣されたGHQ政治顧問事務所の工

マーソン所員。文書は憲法草案を受け入れ、修正

本政府の憲法調査が始まつたばかりの時期。同研究会の草案はGHQの憲法草案に影響を与えたとされるが、さらにその関与を裏付ける資料として注目されそうだ。

(社会面に連載「憲法の孫たち」) 書簡では、新聞紙上で活躍になつた憲法学者

日本人の意見と題する書簡では、新聞紙上で活躍になつた憲法学者

日本公文書館で入手した。立法者、原秀成氏が米国人の意見についての書簡では、新聞紙上で活躍になつた憲法学者の意見を紹介。

「憲法改正についての日本人の意見」と題する書簡では、新聞紙上で活躍になつた憲法学者の意見を紹介。

「上野中央」によると、この上野中央は、憲法改正の必要性を明確に指摘している。

鈴木氏は、「憲法改正の必要性を明確に指摘している」と評価。「政党内閣が発展しなかつたのは、大日本帝国憲法に因がある」との鈴木氏の主張に同調した。

鈴木氏は、高野岩三郎元東大教授らと7人で45年1月に憲法研究会を開催した。12月26日、「憲法草案要綱」をまとめ、元東大教授らと7人で45年1月に憲法研究会を開催した。毎日新聞は1面で報道したが、当時はあまり注目されず、政府の旧憲法調査会が64年にまとめられた報告書で「GHQ草案の起草者によって相当に重要視され参考された」と一定の評価を受けた。

鈴木安蔵や憲法研究会の業績を知りうともしないで、今時舞で恥ずかしい『憲法研究會論』

▼2007年8月5日の『毎日新聞』
全国版第1面

戦後 憲法草案提言の鈴木安蔵氏

GHQが「評価」の書簡



通学者・鈴木安蔵
(1904~1983)

○今年8月5日付の『毎日新聞』は、第一面で鈴木安蔵の功績を高く評価する「上の記事」を発表。また同日『毎日新聞』の他ページでも、憲法研究会の業績や「憲法の孫たち」というシリーズで、憲法成立がアメリカからの「押しつけ」ではなく日本人自身の発想という真実を熱心に説明しています。映画『日本の青空』が史実であることを証明してくれています。○同封の「別紙プリント」「毎日新聞」コピーなどもご覧ください。